



TITLE:

[15-2] 「速水コメントをめぐって」

AUTHOR(S):

CITATION:

[15-2] 「速水コメントをめぐって」 . DDニューズレター 1984, 15: 11-12

ISSUE DATE:

1984-04-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/236208>

RIGHT:

《 1 5 - 2 》

「速水コメントをめぐって」

速水教授は、DDNL第14号に御寄稿下さり、地代発生に関するお考えを述べている。それをめぐる何人かの人達の考えを以下にまとめてみる。

〔速水教授の論点〕

イ リカード以来の経済学における限界地の定義をもってすれば、かつてDDにおいて地代が発生しなかったのは、その限界地性によると考える。

ロ ところで限界地性は、土地の豊沃度と市場距離とにより定まる。

ハ したがって、現在のDDで地代が発生しているのは、

a . 開拓前線の前進によるDDの土地豊沃度の相対的改善、and/or

b . 市場距離の短縮、

であろうかと一応考えられる。

ニ しかしながら、教授は、米という産物の性格からして市場距離の影響は大きくないから、b の可能性を否定する。また、a の可能性（すなはち、DDより劣悪な条件下にある新開拓地での米生産のコスト（＝価格）は、DDにおけるコストを上まわるから、後者の生産が有利になり、余剰を生じるとともに、地代が発生したとする可能性）を想定するが、必ずしも最重要視しない。

ホ 地代発生の説明として教授がもっとも重要と考えるものは、経済距離短縮による農外収入の機会の増大である。

〔論点〕

1 . 耕地の外延的拡大によるDD米生産の相対的有利化（上記 a の可能性）について

水野調査時と現在とを比較すれば、地主・小作関係が増え、地代が発生したことは、事実である。また、その間に耕境が拡大したことも事実である。しかし、このふたつのみをもって、リカード理論が適用されうると断定できるであろうか。この間に米の価格の上昇があったとは言え、それは、すでに存在していた地代を吊上げ、これに~~米の価格~~すれ、ゼロからの余剰米生産を結果するであろうか。とくにDDのように、生産性の上昇や販売米の増加がほとんどないと考えられる場合。いずれにせよ、DDにおける地代の発生に対して、リカード理論が適用可能あるいは不可能であるかどうか

を実証するためには、いかなるエヴィデンスがさらに必要であろうか。

2 通勤兼業所得の増大と地代発生との関連について

両者間の因果関係が必ずしも明確でない。通勤農外所得は、はたして水田に対する需要を大きくするであろうか。その場合、水田購入の需要と小作希望者の増加の両方を考えねばならないのか。

3 地代発生と小作地の需要と供給

地主・小作関係が成立するためには、土地を貸したいという人と、借りたいという人とが共にいなくてはならない。DDで土地を借りたい人が増えたのは、人口増のためと一応考えられる（人口増は、自然増と移山人口の低下とによって決まる）。一方、貸したい人が増えたのは、小作料目当ての商業的地主の発生のせいではなく、農外収入（必ずしも在村農外収入だけではなく）の機会増大と考えられる。その場合、農外収入が非常に安定しておれば、あるいは、遠隔地への半永久的移住を伴うのであれば、農地を売却こそすれ、地主化することはないかも知れない。しかし、DDでは、農外収入が安定的でなく、かつ、在村の農外収入が可能であるために貸し手が増えたと思われる。

4 稲作・畑作の差

以上の1, 2, 3の論点は、すべて稲作を考えた場合である。畑作の場合には、リカードの理論は、ほぼ適用されると思われる。すなわち、耕境拡大によるDD農地の相対的有利化、経済距離の短縮の効果などである。

5 リカード理論の限界

余剰生産を伴わない地代の発生、農外収入の増大による地代の発生は、リカードが考えてもみなかったことではなかろうか。DDにおける地代の発生をリカード理論の枠外で説明せねばならないと思われる。であるとするならば、水野時代に地代がなかったことも、リカード理論にない事象で説明することを考えてもよさそうと思われる。

《 1 5 — 3 》 収量変動モデルへの手掛り

収量変動のシュミレーション・モデルを作成することが農学上のこれからの仕事の重要な中心的テーマであり、また、それが実現できれば、社会・経済的データとの総合にも大きく貢献しうるのであることは、すでに何度も指摘されている。

このようなモデルの極く初歩的な最初の試みとして、3年間の豊凶を地形区別に降雨と関連させて考えてみた。